

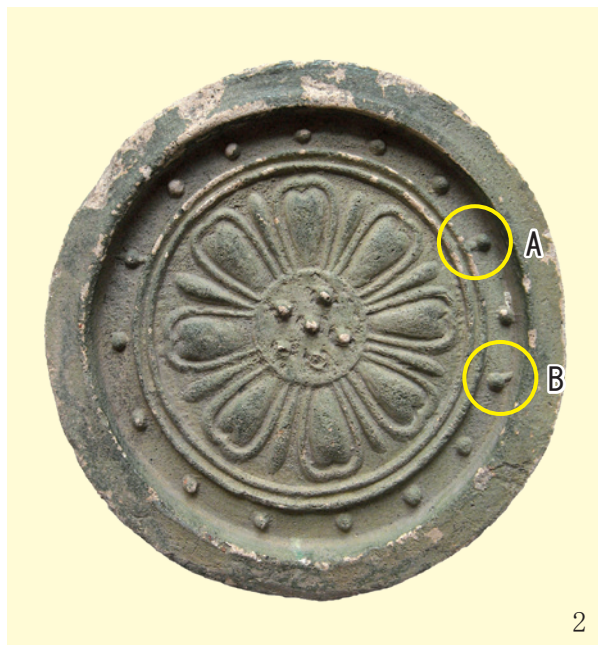
平安宮豊楽殿跡の緑釉軒瓦 ーその生産地をめぐってー

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



推定 西賀茂瓦窯産



推定 栗栖野瓦窯産

写真1 平安宮豊楽殿跡出土の緑釉軒丸瓦

発掘成果 ぶらくでん だいごくでん 豊楽殿は大極殿の西に位置し、両者は国家の儀礼を行なう中心的な建物でした。1987 年の調査で豊楽殿の北西部が検出され、9・10 世紀の瓦が大量に出土しました。遺跡は国の史跡、出土品は国の重要文化財に指定されています。

緑釉瓦 出土瓦で最も目を引くのは、緑色の釉薬を施した一群です(写真1)。これらは緑釉瓦とよばれ、軒先や棟に用いた瓦です。緑釉瓦は大極殿でも出土しています。緑釉軒瓦の製作には、大極殿・豊楽殿専用の瓦範(型)が使われています。宮殿

の中心的な建物に緑釉瓦を用いたのは、日本では平安宮が唯一で、前代の都にはみられない特徴です。豊楽殿では、創建時から緑釉瓦を採用していたとみられます。

緑釉軒瓦は、いくつかの特徴に注目すると、二つの生産地から供給されたことがわかります。

胎土 瓦を生産する際、素材となる粘土に砂粒を混ぜ合わせる作業を行ないます。写真4の瓦は、砂粒が多く混ざり、赤色粒を含む特徴があります。なかには0.5～1 cm 大の礫れきを含むものもあります。写真5の瓦は、砂粒の量は多くなく、黒色粒を含む特徴があります。前者は西賀茂瓦窯産、後者は栗栖野瓦窯産の特徴を示しています。特に後者の黒色粒は、



写真2 緑釉軒丸瓦(写真1)の裏面

くろうん も かくせんせき
黒雲母・角閃石と呼ばれる鉱物で、
かこうがん
花崗岩に含まれています。栗栖野瓦窯
の東側一帯は、花崗岩地帯です(図
1)。瓦窯周辺の地質条件が胎土の鉱
物に反映されています。

製作の技法・手法 軒丸瓦では、
裏面に製作痕跡の特徴が現れます。
写真2の1は、デコボコした仕上がり
で、粘土を削った際に、砂粒の移動
した痕跡が目につきます。写真2の
2は、砂粒の混ざり具合も適度で、表
面を丁寧に仕上げています。

軒平瓦では、凸面に技法の違いが
現れます。写真3の3は布を当てて、
手のひらで押したあと、縦方向に
削って整えています。写真3の4は、
縄を巻き付けた板で軽く叩いて整形
しています。これらの差異は、胎土の
違いとも対応していて、1・3は西
賀茂瓦窯産、2・4は栗栖野瓦窯産
であることを示しています。



推定 西賀茂瓦窯産

写真3 平安宮豊楽殿跡出土の緑釉軒平瓦



推定 栗栖野瓦窯産

瓦範 西賀茂瓦窯・栗栖野瓦窯の
調査成果によると、型押しして文様
を表す瓦範は、同じものであること
が判明しています。瓦範は木製で、
使用を繰り返すと、表面が摩耗しま
す。この傷を根拠に、製作時期の先
後関係が特定できます。写真1の
1・2を比較すると、○印Aの位置
には共通の傷があります。ところが
Bの位置には、2に傷があつて、1
にはありません。つまり、1より2
が後に製作されたことがわかりま
す。この差は、西賀茂瓦窯から栗栖
野瓦窯へ瓦範が移動し、前者から後
者へ緑釉瓦生産が移行したことを
示しています。

緑釉瓦生産の再編 西賀茂瓦窯
では、普通の瓦が主に生産されてい
て、緑釉瓦の生産は小規模でした。と
ころが、操業当初の栗栖野瓦窯は、緑

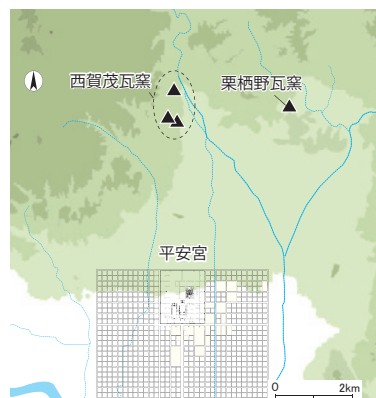


図1 瓦窯の分布

釉瓦の生産に特化しており、この時
期、普通の瓦は生産していません。つ
まり、前者から後者への移行は、普通
の瓦と緑釉瓦の生産を切り離し、生
産の効率化をはかったものとみら
れます。

豊楽殿と平安宮造営 大極殿が
完成した延暦15年(796)以降、平安
宮造営担当の役所が造宮使から造
宮職に改められます。これは、組織の
拡充であり、豊楽殿を含めた大規模
造営に対応するための動きです。上
述の緑釉瓦生産の再編もこの動向
のなかで位置付けられます。豊楽殿
の緑釉軒瓦は、こうした造営事業の
画期を語ってくれています。

(古閑正浩)

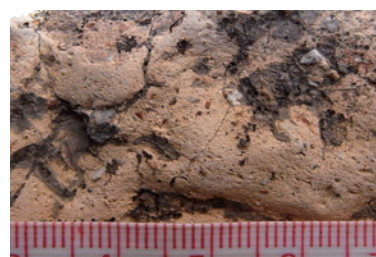


写真4 推定西賀茂瓦窯産瓦の胎土

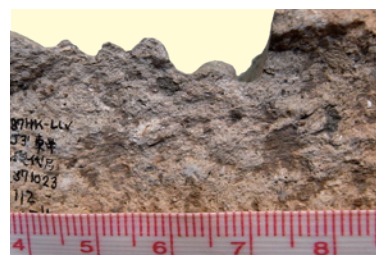


写真5 推定栗栖野瓦窯産瓦の胎土